

「海洋の構造」 層を成す3種類の海水

湾自体が天然資源

富山湾は駿河湾、相模湾に次ぐ全国でも3番目に深い湾だ。岸からわずか10~20kmの所で深さが1,000mにも達する急深な海底地形が特徴である。大陸棚の面積は狭く、湾の奥の海底には深い谷間(海底谷)が数多く刻まれている。

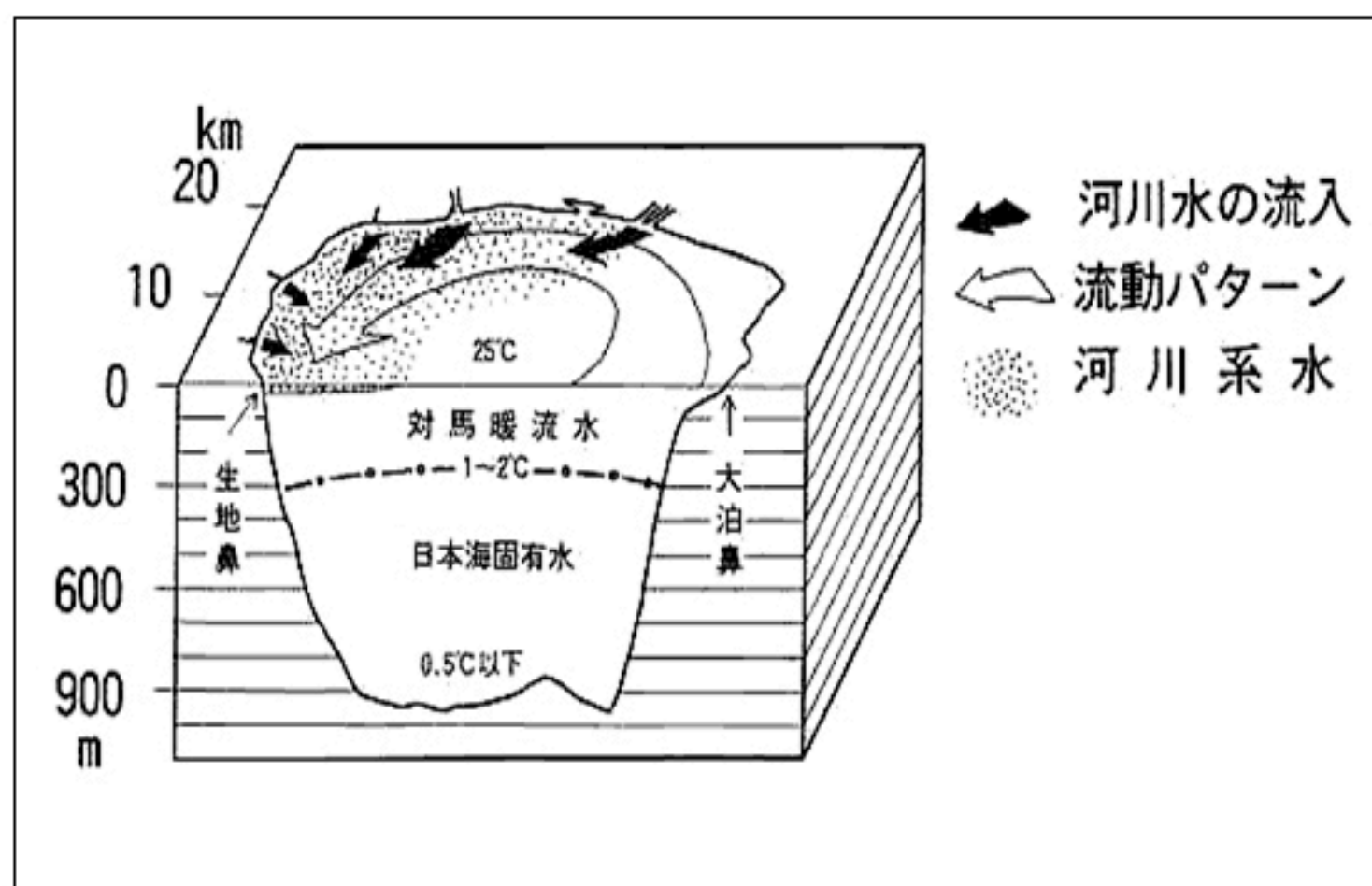
富山湾では、3種類の海水が層を成す。300mよりも深い部分は年間を通じて水温1~2℃の日本海固有水(深層水)があり、その上には温暖な対馬暖流水がある。そして岸近くの表層には、河川水の影響で塩分の低くなった沿岸表層水が分布する。

富山湾の漁業の中心はなんと言っても定置網漁業である。海岸線の長さが約100kmしかない富山県の沿岸には、狭い大陸棚の上におよそ150の定置網漁場がひしめくように並び、年間2万トン近い魚類やイカ類が水揚げされている。

アジ、サバ、イワシ類、スルメイカはもちろん、ブリやホタルイカもほとんどすべてが定置網で獲られている。定置網は浅い所にあるので、獲られるものの8割は対馬暖流に生息する暖水性のしかも回遊をする生き物たちである。

定置網以外の漁業で獲られる深く冷たい海に生息する生き物たち、ホッコクアカエビ(アマエビ)やベニズワイ、バイ貝の仲間そしてシラエビなども忘れることはできない。特に海底谷に生息するシラエビは、世界でもここ富山湾だけに産するオンリーワンの特産品だ。深い海が岸近くに迫っていることが、これらの漁業を容易にしている。

よく言われるが、富山湾では「暖流と寒流がぶつかって」はいない。特徴的な地形と異なる性質の海水の重なりが、富山湾の多様な海産物を提供してくれているのだ。個々の生き物もさることながら、富山湾そのものが我々に幸をもたらす貴重な天然資源といえよう。(内山勇)



富山湾の海洋構造模式図(夏に北から見た様子)